

ケース事例

事例①

性別	男児
年齢	7 歳 10 か月 特別支援学校 2 年生
診断名	自閉症スペクトラム 重度精神発達遅滞 (療育手帳 A 判定)
成育歴	普通分娩により出生。1 歳半健診で発達の遅れを指摘され、児童福祉センター発達相談所につながる。2 歳から児童発達支援センターの親子通園、その後児童発達支援センターに毎日通う。卒園後は地域の特別支援学校に入学、現在に至る。
家族構成	父、母、姉 (小学 6 年生) の 4 人家族
家族状況	父親は仕事が忙しく、育児への協力は少ない。本児には父親は怖い存在で、言うこともよく聞く。母親は現在専業主婦で、本児の障害理解や対応についても良好で、細かいところの配慮もいきとどいている。少し神経質な面もあり、本児の様子については丁寧な説明が必要。姉は本児の面倒もよく見てくれ、母親をよく手伝っている。
他機関の利用	児童福祉センターで診断を受けた。発達検査は療育手帳や特別児童扶養手当の更新手続きの際に受けている。 放課後等デイサービスについては 1 か所を利用し、支給量は 14 日で受給者証の申請を行っている。
利用の状況	就学後、学校と家庭以外で通えるところを作りたい。学校でがんばっているのを、のびのび発散して遊べるところが欲しい。現在週 2 回の利用、今後回数は増やしていきたい。
日常生活の技能	・食事 スプーンを使用、偏食が強く、食べられるものが限られている。特に初めての物は食べない。家庭では無理をせずに食べられるものにしている。給食については 1 年生の頃は全く食べられなかったが、2 年生になり、担任との信頼関係ができ、少しずつ食べられるようになってきている。 ・着脱 着脱はほぼ自立、ときどき声掛けが必要なときもある。 ・排泄 自分でトイレに行く。
健康状態	・元気で休むことも少ない。
運動機能	・トランポリンなど、身体を動かす遊びが好き。体力もあり、長時間の散歩も楽しめる。
言語理解	・「公園に行こうか」などの声かけは理解している。日常的な声かけは理解しているようだが、言葉だけでなく状況を見て理解している様子

	が見られる。自分がやりたくない内容の場合、応じない時もあり、わかりにくい場合もある。職員や他の子どもたちのしていることと同じことをしているときもある。
言語表出	・イク、クルマなどの単語や、やりたいことを少しずつ言葉で伝えることも増えてきている。要求は大人の手を引いて伝える。
好きな遊び	・アニメの DVD が大好きで、よく見ている。大人とのやり取りなどの遊びは成立しにくい、くすぐり遊びや追いかけては楽しむ。プラレールや自動車も好きだが遊びとして展開するのは難しい。
対人関係	・かかわりを求めたいときは、わざとお茶をこぼしたり、職員が困ることをする。ダイナミックに遊んでくれる人やちょちょちなど好きな遊びでかかわってくれる人が好き。一方的に指示を出して従わされることには強く抵抗し、拒否をする。
集団参加	・人が多いところは苦手で、輪の外で様子を見ていることが多い。聴覚過敏もあり、大きな音や騒がしいところには参加しない。
道具の操作	・スコップなどの道具を使って水や砂の出し入れはできる。道具が思い通り扱えないときは、投げてしまうこともあり、注意が必要。日常で使う道具には興味があり、職員と同じことをしようとする。
移動	・職員と手をつないで歩くことができるが、興味のあるものを見つけると突然走り出してしまうこともある。
留意事項	・要求がうまく伝わらないときに、部屋から飛び出すことや、強く指示された場合など、相手に手が出ることもある。
発達評価	新版 K 式発達検査 2001（6 歳 0 か月に児童福祉センターで実施）

	発達年齢	発達指数
姿勢・運動	3 歳 1 か月	51
認知・適応	1 歳 7 か月	26
<u>言語・社会</u>	<u>1 歳 5 か月</u>	<u>24</u>
総合	1 歳 8 か月	28

<所見>抜粋

運動面：ケンケン難しいが、階段の上り下りはできる。

認知面：積み木を 8 個積むことができる。はめ板（○△□）の課題は指示内容の理解はできなかったが、検査者がモデルを示すとできた。

言語面：検査場面での発語はなかったが、自発語、有意味語が出始めている。

総合：言葉での指示は表出言語に比べると理解している言葉は多い。モデルを見せることにより、理解が促される。興味のあるものには参加することもあるようで、本人の興味及び関心に合わせて、主体的な活動の幅を信頼できる大人との関係を基盤に広げていくことが必要と思われる。

事例②

性別	女兒
年齢	11 歳 2 か月
診断名	ダウン症候群 中度精神発達遅滞 先天性心疾患 療育手帳 B2
成育歴	1 歳で発達相談所の発達検査を受け、療育での発達支援が進められる。心疾患の治療が優先し、リハビリには通っていたが在宅で過ごす。3 歳から保育園に入り、並行して児童発達支援事業所の療育に週 1 回通う。就学は地域の支援学級に在籍して現在に至る。
家族構成	父、母、兄（中学 2 年）、姉（小学 6 年生） 本児の 5 人家族
家族状況	父親のダウン症に対しての理解が難しく、母親が一人で本児の養育を担っている。本児の状況が落ち着き保育園に入園してからは、母親も就労し、パートではあるが仕事を始める。兄弟は本児を可愛がっている。
他機関利用	療育手帳や特別児童扶養手当の更新時に児童福祉センターで発達検査を受ける。現在は問題がないが、心疾患の経過観察のため病院に通院。放課後等デイサービスについては 2 か所を利用し、支給量は 23 日で受給者証の申請を行っている。
利用の状況	週 2 回、1 か所の放課後等デイサービスを利用しているが、他にもう 1 か所放課後等デイサービス事業所を週 2 回利用している。
日常生活の技能	食事、排泄、着脱など基本的生活習慣については自立している。
健康状態	特に問題はなく、元気に休まず通所している。
運動機能	公園などで体を使って楽しく遊ぶことが好き。
言語	友達とのやりとりを楽しむことはできるが、言葉でのやり取りは、言語の不明瞭さもあり、一方的な会話になっていることも多い。文字の習得も少しずつできている。
道具の操作	簡単な工作や調理の活動が楽しめる。
集団参加	お友だちと一緒に活動を楽しむことはできるが、活動の切り替えや終了時に気持ちの折り合いが付きにくい時がある。ゆっくり待ってあげることで、自分から切り替えることができる。 自分の好きな活動が用意され、積極的に参加することで、出来上がりの達成感や満足感を感じることができる。仲の良い友達と一緒に活動も楽しめている。
小学校の様子	学習面は 10 までの数の理解、ひらがなの習得を課題として、学習を進めている。支援学級の小集団では落ち着いて様々な活動に取り組み、学校生活を楽しんでいる。

留意事項 活動への見通しが持てないときは、まず「イヤ」というところから始まるが、実際に活動が始まると、自分から参加してくる。しかし、「～してから～する」という見通しを持つことが難しく、すぐに気持ちが離れてしまうことがみられる。わからなくなった時に、すぐに具体的な指示を出すなどのサポートが必要。

発達評価 新版 K 式発達検査 2001（10 歳 8 か月に児童福祉センターで実施）

	発達年齢	発達指数
姿勢・運動		
認知・適応	4 歳 5 か月	41
言語・社会	4 歳 3 か月	40
総合	4 歳 4 か月	41